

令和8年7月11日(土)

お早うございます。大友さんの解説は、ご自身の思いも交えながらお話下さったので大変良かったと思います。今、岡田さんはどのように選べばよいだろうかとお考えになっていると思います。大友さんの選び方が大変良かったので、素読の説明をしながら選ぶ際の考え方についてもお話したいと思います。

では素読の説明に参ります。

① ^し ^{かわ} ^{ほとり} ^あ ^{いわ} ^ゆ ^{もの} ^か ^{ごと} ^{ちゅう} ^や ^お
① 子 川 の 上 に 在 り て 曰 く、 逝 く 者 は 斯 く の 如 き かな。 昼 夜 を 舍 か ず と。

(子罕第九・16)

孔子が川のほとりに立ち、流れる川を眺めながら、「流れ去っていくものは、この川の流れのようなものだ。昼も夜も休むことなく流れ続けている」と語った言葉です。

ここで使われている「逝く」には、過ぎ去る、死んでいくといった意味も含まれています。そのため、この言葉には川の流れだけでなく、人の一生もまた絶えず過ぎ去っていくものだという思いが込められていると考えられます。

孔子も一人の人間ですから、若い頃はエネルギーにあふれ、前向きに歩んでいました。しかし、年齢を重ねるにつれて、思うように体が動かなくなり、自分のやりたいことも思うように進まなくなっていくます。体力の衰えも感じるようになり、そうした思いが次第に強くなっていきました。

そこで孔子は川のほとりに立ち、流れる川を眺めながら、時の流れや人生について思いを巡らせます。鴨長明の方丈記にも似ているものがありますが、「自分もずいぶん年を取ったものだ。自分の志をしっかりと受け継いでくれる人物は育っただろうか。いや、まだ十分ではないな」と感じたのでしょう。

唯一期待を寄せていた最も優秀な弟子の顔回を亡くした後、自分の教えを受け継ぐ人が現れるだろうか、自分の思想が後世の弟子や孫弟子へ伝わってほしいと心の中で願っていたのがこの章の出だしです。大友さんは、それをとても上手にすくい上げ、取り上げて下さいました。

私は川を見ても、孔子のような考えに浸ったことはありません。最近の水かさが増えたな、また台風が来るのだろうか、津波が来たらどうなるだろうか、といったように、どうしても災害のことを考えてしまいます。しかし孔子は、川の流れを見ながら自分の人生を重ね合わせたのでしょうか。昼も夜も休まず流れ続ける川のように、自分も年を重ねてきた。

孔子は、これは私が考えたことだと自分の考えを断言するのではなく、先人たちの教えを大切にしました。多くの人々が様々な考えを残していますが、その中からこの教えは素晴らしい、大変参考になる、と感じたものを分かりやすく人々に伝えたのです。

孔子が新しく決めたのではなく、昔の人々の優れた教えを大切に受け継ぎ、自分の考えで変えることはしませんでした。

②孔子 季氏を謂う。八佾 庭に舞わす。是をも忍ぶべくんば、孰れをか忍ぶべからざらんと。（八佾第三・1）

結婚式などのお祝いの席では、国によって踊りを披露することがあります。この章も、中国で舞を踊らせたことを題材にしています。

ここに出てくる季氏という人物は、おごり高ぶった人、増上慢な人のイメージです。自分は何と偉いのだと思い上がり、身分を超えた振る舞いをする人物です。

日本でも明治時代の新興成金には、非常に派手な遊びをした人がいたと言われています。座敷にお金をばら撒き、芸者さんたちに早い者勝ちでお金を拾わせたそうです。綺麗に着飾った人達が、必死にお金を拾う姿を見て楽しむ遊びがあったと伝えられています。

「八佾」とは、1列8人を8列並べた、64人による舞を意味します。当時、8列64人、八佾の舞を行うことが許されていたのは、天子だけでした。その下の諸侯や大夫、士には、それぞれ身分に応じて舞人の人数が定められており、礼の決まりとして守られていました。季氏は陪臣という家臣の立場でしたので、本来であれば4列32人の舞が身分相応ですが、諸侯を超えて天子と同じ64人の舞をさせました。

それを見た孔子は、天子のみに許されている八佾を、臣下である季氏が身分を超えて舞わせたことを、強く非難しました。身分をわきまえず、おごり高ぶることへの戒めとしてこの句があります。

③子曰く、群居すること終日にして、言義に及ばず、好みて小慧を行わば
難きかな。（衛霊公第十五・16）

孔子は、「大勢で一日中集まっていますが、話題が正しい道理や義に及ばず、小賢しい知恵ばかり働かせているようでは困ったものだ」と述べています。

ここでいう「小慧」とは、小賢しさやずる賢さのことです。知恵を使って少しでも得をしよう、楽に儲けようと考えることばかりに心を向ける姿勢を指しています。

この言葉を聞くと、私は国会中継を思い浮かべます。多くの人が集まって議論をしていますが、目先のことや小手先の議論ばかりで、本当に国のためになる議論が十分に行われていないと感じます。法律をつくるのであれば、もっと真剣に国の将来を考えて議論してほしいものです。

消費税の税率をめぐる議論なども、その場しのぎの対応に終始しています。こうした小手先の知恵ではなく、国会なら国全体の将来を見据えた議論が必要ではないかと思います。

木内信胤先生は、「国が貧しくなったとき、その国を存続させたいのであれば、税負担をできる限り軽くすることが大切である」と述べておられました。また、渡部昇一さんも、歴史を振り返ると、多くの国は重い税負担によって衰退していったと指摘しています。

日本でも終戦後に驚く程高い税率が課された時代があり、多くの人が大きな負担を背負いました。中斎塾フォーラムの会員だった群馬日野自動車社長の中村さんも、幼い頃に税負担によって家業が苦境に立たされ、家族が大変苦労した経験を語っておられました。

小賢しい知恵ばかりを働かせて国会で議論をしている人たちには、ぜひ渡部昇一さんの著書を読んでほしいものです。

今後の予定についてご案内します。7月5日には、靖国神社の能楽堂で吟詠を奉納させて戴きました。初めて参加された岡田さんからは、「このような場で詩吟を披露できるとは夢にも思わず、大変貴重な経験になりました。」と感想を戴きました。

私自身も以前、伊勢神宮を訪れた際、能楽堂で独吟させて戴いたことがあります。大変気持ち良い経験でした。

人生では、夢にも思わなかった経験を一年に何度か味わえると、その後の楽しみが増えていきます。このフォーラムでも、そうした機会がきっとあると思います。

8月はお休みですが、9月12日には東京フォーラムを開催します。10月4日に明治神宮で吟詠を奉納し、11月22日には吟詠の本部大会を予定しています。

また、8月22日には私が執筆した西郷隆盛の本が刊行され、東京駅の丸善に並ぶ予定です。この本は、当初500ページほどあった原稿を何度も推敲し、出版社との校正を4回ほど重ねました。出版社では誤字脱字を無くす為に丁寧な校正を行いますが、今回は最終確認まで私自身が責任を持って行い、その原稿をそのまま出版して戴くことになりました。

新刊は9月12日の東京フォーラムにご参加戴いた皆さんへプレゼント致しますので、ぜひご出席ください。もちろん、それまでに読みたいという方は、8月22日の発売後に丸善でお買い求め戴ければと思います。

今回の本作成にあたっては、佐藤さんに大変お世話になりました。当初はテープ起こし等の協力をしてもらっていましたが、出版社とのやり取りを重ねるうちに、「この文章はこちらに移した方が良いのでは？この表現は違う言葉にした方が伝わりやすいのではありませんか？」といった具体的な提案をもらうようになりました。

そのやり取りを通じて、佐藤さんは単なる協力者ではなく、本づくりを共に進めるパートナーになったと感じています。夫婦も同じで、最初は協力し合う関係から始まり、長い年月を経て一心同体のパートナーへと変わっていくものだと思います。

夫婦であれば、どんなに仲が良くても、ときには喧嘩をすることがあります。そのようなときは、お互いに言い合いを続けるのではなく、自分から先に「ごめんね」と伝えてみるのが大切だと思います。

納得できない気持ちがあったとしても、自分から謝ることで、相手も「こちらこそ」と素直になり、自然と仲直りにつながるものが少なくありません。これは私自身の実感ですが、夫婦喧嘩では先に謝った方が勝ちです。

話は変わりますが、この間、東京ステーションホテルに宿泊しました。東京駅の中にあるホテルなので、内部は細長い廊下が続いています。歩いていると宿泊客と何度もすれ違いましたが、軽く会釈を交わす方が多く、とても気持ちのよい雰囲気でした。

それ以上に感心したのは、清掃スタッフの方々の接客です。遠くからお客様に

気づくと立ち止まって一礼し、すれ違う際には壁側に下がって「どうぞお通り下さい。お越し戴き有難う御座居ます」と丁寧に声をかけてくれました。その姿勢に感動し、これは会社の教育かと尋ねると、「入社した時、ここまで徹底した教育をするのかと驚きました」と話して下さいました。

その話を聞いて、東京ステーションホテルについて書かれた本を取り寄せて読みました。そこには、新郎新婦が館内を歩いていると、金婚式で訪れていたご夫婦から「おめでとうございます」と声をかけられ、「私たちも 50 年前にここで結婚式を挙げました」と語り合う場面が紹介されていました。

その中で新郎新婦は、「このホテルで結婚式を挙げて大変良かった。50 年後、金婚式をここで挙げたいという夢が生まれました。」と語っていて、このホテルには特別な雰囲気があるのだと感じました。

実は以前、東京駅を訪れた際、駅長さんにご案内いただき、天皇陛下がお泊まりになるための特別なお部屋を見学させてもらったことがあります。一般的なスイートルームとは異なり、天皇陛下のためだけに用意された特別な部屋で、そのお話を伺いながら、このホテルはやはり他と違うと感じました。

私も金婚式を経験しましたが、結婚生活は決して平坦ではありません。新婚の頃は、痘痕も笑窪で相手の良い所ばかりが目につきますが、年月と共に様々な出来事を経験します。それでも、一つひとつを乗り越えながら金婚式という節目を迎えられることは、大きな喜びです。どうか皆さんも、お互いを大切にしながら歩みを重ねて戴きたいと思います。

話が逸れましたが、新入会員の方も日々の生活や社会全体を見ていて、これは心に響くなと感じることがあれば、それに合う論語の一節を選んでみて下さい。また、論語を読んでいて心に響く言葉があれば、この言葉について皆さんはどう考えるのだろう、解説を聞いてみたい、と思う箇所を選ぶのも良い方法です。

世の中を憂う気持ちがあれば、その思いに重なる章句が自然と目に留まるでしょう。年齢を重ねるにつれて、心に響く言葉も変わってくるものです。

私もそのことを実感する出来事がありました。私は詩吟をしておりますが、先日、靖国神社の能楽堂にて 11 名による奉納吟詠に参加しました。並ぶ順番をどうするかという話になり、今日は年齢順でいきましょうと提案がありました。私はすぐに賛成し、90 代、80 代の方がすぐ並び、私は 79 歳ですので「70 代です」と言って、その次に並びました。

70 代にもなると、若い頃には考えもしなかったような体の不調や病気を感

ることがあります。年齢を重ねるごとに、今の自分ならこの言葉が心に響くと感じる章句を選ぶのも良いのでしょうか。

〈令和 8 年を考える〉

今回は半年経過しましたので、レジュメ 3 番目のテーマ「令和 8 年を考える」の内容を見直し、これまでとは異なる文章に変更しました。

新しい内容では、歴史は繰り返すをテーマとして、戦争によるインフレーションの激化、金融庁による名寄せ制度の整備、ネバダレポート等を取り上げています。私が読んだ資料の中で、これは皆さんにもぜひ読んで戴きたいと感じた文章を引用し、紹介しています。

その一つが、配給制度に関するエピソードです。実際に当時を体験された方であれば、そういう時代だったと実感される内容だと思います。

配給制度が行われていた昭和 17 年、あるデパートの地下で天ぷらが揚げられていました。久しぶりに揚げたての天ぷらが食べられると思い、すぐに購入して喜んで家に持ち帰り、食卓に並べました。しかし、いざ口に入れてみると、その天ぷらは腐っていたそうです。

当時は、このようなことが珍しくなく、配給制度のもとでは日常的に起こっていたことが伺えます。このエピソードは、世界文化社発行『日本歴史シリーズ 第 21 巻 太平洋戦争』の中で、ある主婦の日記として掲載されていたものであり、当時の暮らしの厳しさを伝える印象的な記録として掲載しました。

今回、意識的に加えた内容の一つが、木内信胤先生による金融緊急措置令に関する記述です。

金融緊急措置令が制定された当時、木内信胤先生、池田勇人氏、福田赳夫氏、そして他の関係者を含めた数名が一室に集まり、どのような法律を作るべきかについて議論を重ねていたそうです。その当時のやり取りや状況が記された資料がありましたので、今回掲載しました。

途中木内先生とのやり取りの中に、目に留まる一節がありました。添付資料をご覧ください。

石井茂樹さんが木内先生に対して、「あの当時、封鎖を食糧の供出促進を理由としてやったということは表には出なかったのですね」と質問しています。

木内先生は、「言わなかった。食糧の供出が悪いなんてことは、言うてはいけないことですから」と答えています。

こうした率直なやり取りは、資料の中でもなかなか目にすることがありません。このような会話をそのまま掲載してくれたことに、とても価値があると感じました。

この内容は、原薫著『戦後インフレーション—昭和 20 年代の日本経済—』という本に掲載されています。以前から手元に置いていた本ですが、改めて読み返してみても非常に興味深い内容でしたので、今回皆さんにもご紹介したいと思い、レジュメに取り入れました。

資料③で名寄せの整備について触れています。

金融庁は、2005 年 4 月から始まったペイオフの解禁・実施に合わせて名寄せの整備（国民一人ひとりの資産を捕捉・監視する行動）を公言。国民とくに資産家、経営者層の個人金融資産を、すべて一元的にコンピュータで管理して把握（捕捉）するのが、監督庁として当然の行為だ。

（「恐慌前夜—アメリカと心中する日本経済」副島隆彦著）

名寄せの整備は、この頃から進められていたことが分かります。現在ではマイナンバーカードの普及が進められていますが、この資料には、金融庁がペイオフ解禁の実施に合わせて名寄せの整備を積極的に進める方針を公表していたことが記されています。

名寄せとは、複数の金融機関に分散している同一人物の口座や資産を照合し、一元的に把握できるようにする仕組みです。例えば、ある人が銀行や信用金庫など複数の金融機関に預金を分けて保有していた場合でも、それらを一人の資産としてまとめて把握できるようになります。

このような名寄せの仕組みは、財務省が以前から実現を目指してきたものとされており、マイナンバーカードの導入は、その流れを受け継いでいます。これまで把握しにくかった資産も確認しやすくなり、課税対象の財産をより正確に把握出来るようになりました。

お尋ねしますが、マイナンバーカードをお持ちの方はどれくらいいらっしゃいますか。多くの方がお持ちですね。お持ちでない方はいらっしゃいますか。（数名挙手）ありがとうございます。実は私も持っていません。

私がマイナンバーカードを取得していない理由は、制度を導入した政府の考え方に納得できないからです。制度が発表された当初、取得が法的に義務化されるまでは持たないと宣言しています。

現在では、銀行や郵便局など様々な場面でマイナンバーカードの提示を求められます。最近、病院へ行くと受付で「マイナンバーカードはお持ちでないですか」と聞かれ、少し見下されたような対応を受けることもあります。受付の方に「あなたはマイナンバーカードを持っているのですか」と尋ね、持っていると答えられると、仕方がないのでその場で5分程マイナンバーカードが導入された経緯について説明することがあります。

マイナンバーカード制度の目的の一つは、個人の資産や所得をより正確に把握し、課税漏れを防ぐことにあります。

資料④のネバダレポートについては、これまで何度もお話ししてきましたので、詳しい説明は省略します。以下抜粋をご覧ください。

〈五十嵐文彦氏が示したレポートの内容〉

- ①公務員の総数、給料は30%以上カット。及びボーナスは例外なくすべてカット。
- ②公務員の退職金は一切認めない、100%カット。
- ③年金は一律30%カット。
- ④国債の利払いは5年から10年間停止。
- ⑤消費税を20%に引き上げる。
- ⑥課税最低限を引き下げ、年収100万円以上から徴税を行う。
- ⑦資産税を導入し、不動産に対しては公示価格の5%を課税。債券、社債については5%から15%課税。
- ⑧預金については一律ペイオフを実施し、第2段階として、預金を30%から40%カットする。

（「日本国はいくら借金できるのか？ 国債破綻ドミノ」川北隆雄著）

次に資料⑤ですが、中曽根康弘氏の生涯について調べ、多くの資料を収集していました。それらを改めて見直していたところ、こんなことを書いていたのかと思う記述を見つけ、ぜひ紹介したいと思い、今回資料に加えました。

中曽根康弘氏は、「日本の財政経済の現実、まさに死の淵に臨んでいます」と記しています。この一文を残しただけでも、大変立派な事だと思います。

最後の部分では、世界全体を見渡せば、経済恐慌や悪性インフレ（ハイパーインフレ）といった深刻な経済危機は、歴史的には戦争という形で終結してきたと述べています。

最後に資料⑥ですが、調べてみると、「未来年表」という書籍はいくつかあり、いずれも同じ出所で、執筆者だけが異なっていました。

以下抜粋をご覧ください。

国立社会保障・人口問題研究所が「日本の将来推計人口」（2017年）を5年ぶりに改訂したが、本書ではこのデータを駆使して、日本の未来図を描いていく。

2015年時点において1億2700万人を数えた日本の総人口が、40年後には9000万人を下回り、100年も経たぬうちに5000万人ほどに減る。こんなに急激に人口が減るのは世界史において類例がない。われわれは、長い歴史にあって極めて特異な時代を生きている。

（「未来の年表 人口減少日本でこれから起きること」河合雅司著 2017年6月20日発行 講談社現代新書）

本日添付した資料はご覧戴き、もし気になる箇所がありましたら、遠慮なくお知らせ下さい。

〈恒例の質問〉

恒例の質問を致します。今年に入って半年経ちました。

- 今年良い日が続いておられる方
- 嘘はつかれなかったし、嘘もついていないという方
- 有難うと言い続けているし、有難うと言われ続けている方
- 身体の手入れをよくやっていると思う方
- 自分磨きをよくやっていると思う方
- 昨晚寝るとき、満足感を持って寝た方

眠る前には、その日に感じた満足感を思い出すことが大切です。今日は自分のためにも、世の中のためにも良いことができた。自分を褒めてあげたいと思える気持ちで眠れたら、とても良いですね。

大きなことでなくても構いません。美味しいものを見つけたり、人とのちょっとした温かいやり取りなど、日常の小さな喜びも、自分が感じた満足感として大切にして欲しいと思います。これで恒例の質問を終わります。

「令和8年を考える」について、今日の素読に照らし合わせながら考えてみたいと思います。

まず国会や選挙制度についてです。今の選挙は、口が達者であれば当選できてしまい、何をしてきた人なのかよく分からないまま投票しなければならない仕組みだと感じています。選挙制度そのものを変える必要があると思っています。

最近では、投票したい人がいない場合、あえて無効票を入れることもあります。この人には任せられないと感じる候補者ばかりなら、そうした意思表示も必要だと思うからです。そういう人が増えれば、現在の選挙制度も変わらざるを得なくなるのではないかと思います。

もう一つ、マスメディアについて思うことがあります。新聞等には、読者が本格的な意見や論文を発表できる場を、もっと広く設けるべきです。例えば、一定期間その新聞を読み続けた読者であれば、無料で自分の考えを発表できるページを提供する。

社説ではなく、国民の率直な意見を載せる場です。現在の「読者の声」のようなものではなく、日本や社会について真剣に考えた硬派な論文を掲載する場が必要で、たとえ新聞社にとって都合の悪い内容であっても、一定の条件を満たした意見なら掲載する義務を法律で定めてもよいのではないかと思います。

高額な広告費を払って意見を載せるのではなく、国民自身の考えを届ける場を作るべきだと思います。今のマスメディアは、電子化が進む中、社運を賭ける覚悟をもって自らを変えてゆこうとしなければ消滅していくと思います。ただ情報を伝えるだけではなく、日本の為になる議論や主張を生み出す存在になってほしいと思います。

例えば、私なら「子曰く、群居すること終日にして、言義に及ばず、好みて小慧を行わば難きかな」という言葉を踏まえ、国会の予算委員会をもっと国民が見るように仕向けます。視聴率を上げ、そこで何が議論されたのか、国民同士で意見を交わす。その上で、議員の発言や対応について、議論を深め、必要であれば予算委員会での態度や発言について議員に説明を求めることも大切です。マス

メディアにはジャーナリストとしての矜持が何処にあるのかと感じます。月に一度でもいいので、もっと夢や希望を感じられるような新聞やメディアに変えていけないものかと思います。

人の心の中にある、くすぶっている思いにもう一度火をつけることがマスメディアの役割ではないかと思います。

例えば、論語の一節を取り上げ、論語に応じて何ができるのかと現役国会議員に対し問いかけてみる。その議員に投票した有権者が、どのような思いで票を託したのか、それを聞いたことがあるのか、調べたことはあるのか、聞いてみたいと思います。

各メディアには、それぞれ判断基準がある筈です。それならば、各社が共通の判断基準を持ち、社会に向けて示してもよいのではないかと思います。しかし、現実にはなかなかそうはなっていません。

論語の言葉を、今の社会の具体的な問題に置き換えて考えていく。そこから何か新しい運動が始まればよいですね。例えば、無効票を投じるだけではなく、この人だけは選びたくないという意思を示せる投票制度があれば、より効果的かもしれません。そうした仕組みを提案し、大きな動きになればよいと思います。

最高裁判所裁判官の国民審査についても、判断材料が少なすぎると感じます。裁判官自身がこれまでどのような成果を上げ、どのような裁判に関わったのか、何も分からないまま名前だけを見て判断する現在の制度には大きな疑問があります。世の中にはこれはおかしいと感じることが数多くあります。

最後に、今日お配りした資料の「物資欠乏」について、1～2 ページの内容を読んできて下さい。次回、皆さんに感想を伺います。内容について「これは良いと思う、これはおかしい、こんなものを売る人がいるのか」など、どのような意見でも構いません。読んできた方には、こちらからお聞きしたいと思いますので、宜敷お願いします。

時間になりましたので、本日は終了致します。有難う御座居ました。